

技術は世界に通用

横須賀市のサッカー

チーム「横須賀シーガルズ」は米国のチームとの交流も盛んだ。1992年、カリフォルニア州選手権で優勝した高校がクリスマス休暇で来日し、シーガルズと対戦。これが縁となって、94年、98年、01年、03年、そして06年の計5回渡米した。ここでの経験が、シーガルズに大きな財産をもたらしている。

「試合が終わるちょっと前に、いいボールが来たので、ダイレクトで打ったら入りました。こういう試合の大事なところで点を入れ

海外遠征



られて、自分にちょっと自信が付きたいし、何よりもすぐくうれしかったです」

米国遠征の成果を記録した冊子に、ある選手がこんな言葉を残している。99年8月のカ

ロンドン五輪アジア最終予選のオーストラリア戦で相手選手と競り合う日本代表の近賀ゆかり選手。体格で上回る海外の選手に対しても激しい当たりは健在だった。中国の山東スポーツセンターで11年9月5日、西本勝撮影

リフォルニアでの体験 決勝ゴールを放ったをまとめた「Carri fornia サッカ

の旅」の項目。この遠征で、中学生主体のシーガルズがサンノゼ州立大学に1-0で競り勝っている。

日本人の持ち味生かす

すると思った。地味できつい基礎練習ばかりだったシーガルズで身につけた技術が世界で通用する。短いパスをつないで私がシュートして点を入れるシーガルズのサッカーで世界でもやっていけると確信した。近賀選手は当時を述懐する。

遠征の最大の目的はそこにあった。代表の森雅夫さん(69)や総監督の亀田勝昭さん(72)ら指導者が当時から日本の女子サッカーに欠けていると感じていたものは、世界でどう戦っていくのかというビジョンだった。体格に勝る海外選手に対してあまりにも無策。ボールを持っていくと全力でつぶしに来るパワーサッカーの海外チームに対抗するには、俊敏で細やかな技術にだけた日本人の持ち味を生かすしかない。

「小さなパスを速くつないで攻め上がる戦術が、日本の生き残る

道と違い、そのために基礎練習を重視した側面もあった。それが本当に有効なのか試したかったし、うまくいけば子どもたちの自信につながると思った」。亀田さんは打ち明ける。遠征では世界との差を肌で感じ、鍛えて、考えて彼我の差を縮め、善戦や勝利を積み重ねた。指導者の意図は選手に伝わっていた。

⑤

【會岡一樹】
＝つづく

なでしこの源流

女子サッカー王国横須賀

④